
魔法先生と魔法生徒

Lucas

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生と魔法生徒

【Nコード】

N5157H

【作者名】

Lucas

【あらすじ】

私たちの知らない「とある機関」に属するクロードは、機関からの任務により麻帆良へ。任務の内容は『「ネギ・スプリングフィールド」の監視・護衛』麻帆良学園中等部3-Aの生徒として任務を果たします。どんな騒ぎが起こることやら……

1 話目：麻帆良に来る魔法生徒（前書き）

作者は初心者です！変な表現がありましたらそこはスルーで願
いしますww

まあ軽い気持ちで読みながら

「ゆっくりしていいね!!」

1 話目：麻帆良に来る魔法生徒

夏に近づきつつある5月の中旬……

「ここが仕事場であり、俺の学校になる場所……。」

麻帆良学園校門前でこう呟く者がいた……

「しかし、今回の任務の期間の長さも以上だが、内容も内容だな……。」

【ナギ・スプリングフィールド】の息子である【ネギ・スプリングフィールド】の監視及び 護衛……こんなことをしてなんになるというのだ……。」

こうして任務の内容に不満を抱いているのがこの小説の主人公である俺……【クロード・オーウェンス】だ。

俺はある機関に属しており、俺の属している機関は現実世界と魔法世界の裏の治安維持のために動いている。

ちなみにこの機関はこの麻帆良学園の学園長であり関東魔法協会の理事をしている、近衛近右衛門と協力し、関東全域の警護を常時行っている。（らしい……詳しいことはよく聞かされてないからな……）

「ネギ君も一人の魔法使い、自分の身くらい、守れるはずだろうに……。」

この発言はネギに失望しているわけではなく、ネギにはもう自分を

守れるくらいの力は備わっているはずだと思つての発言だ。決して馬鹿にしているわけじゃないぞ、決して。

ちなみに俺は、ネギとは魔法学校で一度知り合っている。もちろん俺が先に卒業し、俺は自分の修業期間がもう3年も経っている。あと少して晴れてマギステル・マギになれる段階まで来ている。

「まあ、どれだけ成長したか、それは楽しみだけだね。」

そう言いつつ、俺は学園内に入ろうとした。すると校門の向こうに人がいて、おれに気づいた。

（あ、あの人つてもしかして……）

「あれ、クロード君じゃないかい？」

「ああ、高畑さん。お久しぶりです。」

「久しぶりだね、前にあったのはいつだったっけ？」

「2年前、魔法世界の辺境での事件以来ですよ。覚えててくれたんですね、僕のこと。」

今の会話からわかるだろうが、俺と高畑さんはある事件を調査しているときに知り合った。

「もちろん。君ほどの若さであそこまで戦えるとは思わなかったからね。」

二人の話している事件については、作者が勝手に作った事件で、原作とは関係ないです（汗
なので、あまり事件については語りません（え
続き……）

「いえ、あの時は運が良かっただけで……。それより、高畑先生はこここの先生をしてらしたんですか？」

「ああ。ところで、君はどうしたんだい？ここへ用があるみたいだけど……。」

聞き返されたので、とりあえず正直に話しておいた。

「用というよりは、依頼されてきたんですよ。こここの学園長先生にね。」

「学園長に？何を依頼されたんだい？」

「この学園に修行に来ているネギ君の監視と、必要であれば護衛をと。」

「ネギ君の？大変だね、後輩の護衛なんて。」

「あ、知ってたんですか？俺がネギ君の先輩だつてこと。」

高畑さんにはこのことは話してないはずだったんだけどな……。なんでわかつたんだろ？

「あの事件の時、君と一緒にいた仲間の人に聞いたんだが、メルデイアナ魔法学校の卒業生らしいね。しかもネギ君と同じく首席だと聞いたよ。」

「あれ、そんなことまで聞いたんですか。あまり首席とかそういう肩書好きじゃないんだけど……。なんか他の人とは違う、みたいな感じで。」

実をいうと、俺は区別とか分けるみたいなのは嫌いというか、苦手だ。

いろんなところで見かける、いじめとか差別とか、そういうところにつながりそうなのだ、そういうものは。経験則、ってやつだな。自分もそうだったからわかる。

「とりあえず、学園長先生に会いたいんですけど……。」

「ああ、そうだね。じゃあついてきて。案内するよ。」

そう言って、俺は高畑先生に連れられて学園長室に向かった……。

1 話目：麻帆良に来る魔法生徒（後書き）

……すいません、まだクロードと高畑さんしか出てない……><;
次は何とか他の人を出していきたいです。

いろんな人のキャラを壊さないように頑張ります^^

2 話目：入学決定！魔法生徒（前書き）

かなり書くのが遅くなりまして、すいません。

前回は短かったので、今回は少々頑張ってみました。
読んでってくださいね〜^^

2 話目：入学決定！魔法生徒

高畑さんに会ってから数分後、俺は学園長室前^{クロード}に来た。

「さて、どんな人かな、近衛近衛右門さんって。」

「あれ、学園長に関しての情報は教えられたんじゃないのかい？」

「知ってるのは近衛右門さんの足跡とかの歴史みたいなものだけで、外見とかは全く教えられてないんですよ。」

「そうだったのか。まあ見たら少しは驚くんじゃないかな？」

「？…なんで驚くんですか？」

「まあ、見ればわかるって。」

高畑さんは何を言っているんだろう。とりあえず、学園長室に入っ
た。

「失礼しま……す……。」

そして俺は固まった……

……目がおかしくなったのかな……

学園長が座るであろう席には、なぜか異様に後頭部が長くいご老人
が……

「これこれ、なぜそんなところでフリーズしてるんじゃない？」

「あ、はい、すいません。近衛近衛右門さん、ですか？」

「いかにも。わしがこの麻帆良学園の長、近衛近衛右門じゃ。」

やっぱそうなのね……。

後ろにいる高畑さんを見ると、呆れたような顔をしていた……。

「それで、本題に移ってもいいですか？」

俺は何故か少し気まづくなっていた空気とおさらばしたかったので、話を切り出した。

「うむ。任務の件じゃが……もうすぐ本人も来る。少し待ってくれるかの？」

本人？ああ、守られる対象、ネギ君のことか。

そういえば魔法学校のこと以来、全然見てないな。

あの時はまだ小さかったけど、今はどれくらいになっているだろう？俺のことは、覚えてくれてるかな？

そんなことを考えていると、扉を叩く音、そして懐かしい声と共にスーツを着た懐かしい顔が入ってきた。

「失礼します……？学園長先生、この人は？」

そう言っただけネギ君は俺を見ながら学園長に問う。

「この人はクロード・オーウェンス君、君の監視及び護衛を依頼したんじやよ。修学旅行の時のように、不測の事態が起きた時のためにの。」

「クロードさん？って、もしかしてクロード先輩？」

「そうだよ。久しぶりだね、ネギ君。」

ネギ君の顔が不思議そうな顔から嬉々とした顔に変わっていく瞬間だった。

というか、覚えてくれてたんだな、俺のこと。

「3年も経つと、顔が変わるものなんです。気づきませんでしたよー。」

「俺はすぐに気付いたな。背が伸びたの以外はあまり変わってないからね。」

と、他愛のない普通の人にもありがちな話をしていると、

「さて、本人も来たところじゃし、本題に入ってもよろしいかの？」

苦笑いをしつつ、学園長が言う。

「あ、すいません。」

俺とネギ君が同時に謝る。なんだこのシンクロした反応は……。

「とりあえずクロード君はこの学園でネギ君のクラスの生徒として任務に就いてもらうことにする。良いかな？」

「あ、はい。それで構いません。」

俺がそう答えると、

「ええ……！？それって本当なんですか？」

ネギ君が困ったような大きな声で質問する。

何故なんだろう、俺が生徒になるのがそんなに嫌なのかな？

と、そんなことを考えてる間にネギ君はさらに疑問形でこう言った。

「僕のクラスは女子クラスですよ？クロード先輩は男なのに……。」

……？今ネギ君はなんとおっしゃったのだ？僕のクラスは女子クラス？何を言っているんだ？

「ま、待ってくれ。ネギ君。それは言葉通りの意味なのか？」

「そうですね！僕のクラスは女子中等部3-A、女子のみのクラスなんです！」

・
―・？

状況は把握した。

が、認めたくない……。認めたくない。

俺が、女子クラスへ編入？なんて厄介なことになってしまったんだ……。

「学園長！俺は男ですよ！？女子クラスに編入なんて、無理でしょう？」

俺は反論する。しかし……

「な〜に、男女共学への転換のために試験的に行うものとすれば怪しまれないじやろ？」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

学園長、あなたはなんてひどい考えをお持ちなんだ……。

試験的とはいえ、女子だらけのところに男を一人放り込むなど……。

あ、ネギ君がいるから二人か。

ネギ君は俺よりも過酷な状況だったはず……

そう思うと、嘆いている自分に少々苛立ちを覚えた。

「……わかりました。とりあえず頑張ってみます。」

「そう言ってくれると助かるわい。ところで気になったんじやが、

お主の荷物は無いのかの？」

学園長は話が一段落すると、話を変えた。

「いえ、大きな荷物は機関の運搬員が持ってきてくれますし、小さな荷物はここに入れてありますので。」

俺はそう言っただけで腕につけている腕輪を見せた。

この腕輪には次元転移の魔法をかけていて、これに物をかざして念じれば別次元に作ってある小規模の空間に保管することができる。しかし、別次元の空間がとても小規模で、1メートル四方の立方体程度の大きさしかないの、あまり大きなものは入れられない。物質圧縮の魔法もかかっている物もあるが、そうなるとんでもない値段になってとても手を出せるような代物ではなくなるので、俺は次元転移のみの腕輪にしている。

腕輪のことについて学園長が聞いてきたので、→のように説明したので、説明して落ち着いた後にあることに気付いた。

「そつえば、俺の住む場所はどこになるんでしょうか？」

そつ、住む場所である。

これがなければどうにもならない。

青空教室ならぬ青空部屋みたいな状況になるのはさすがに耐えられない。

「その件なんじゃがの。女子寮に奇跡的にも空き部屋が一つあるんじゃが、そこに住んでもらうことになる。」

「なんですと！？男子寮とかの空き部屋はないんですか？」

「残念ながら、女子寮にしか空き部屋はないんじゃ。すまんの。」

その事実にはただ呆れるだけになってしまった俺がいる。

そんな、学校でも女子に囲まれ、住む場所にも女子だらけ。こんな地獄はないと思った。

こんなシチュエーションに興味を持つ人がいたら、すぐさま変わってあげたいところだ。

いや、待てよ。

そうだ。ネギ君の部屋に入れさせてもらえばいいのか。

たぶんネギ君は自分の部屋を持っているだろう。だからネギ君ここに居させてもらえれば……

「じゃあ、ネギ君の部屋には住ませてくれませんか？護衛とかもしやすいですし。」

そう発言した俺に、あり得ない真実が襲ってきた。

「僕は自分の部屋じゃなくて生徒の部屋に住ませてもらっているんですよ。だから、自分の部屋はないんです。」

……生徒の部屋に住ませてもらっている？居候ってことか？

まあそんなことはどうでもいい。とりあえず、俺にはもう選択肢が一つしかなくなった。

女子寮に住む。

これしかない。というよりこれ以外に住む場所を確保する手段はなくなってしまった。

まあ、これも必然なんだろうと諦めをつけて、女子寮に住むことを決めた。

「とりあえず今日のところは長旅で疲れたじやろっから学校には登校せずともよいぞ。心の準備とかも必要じゃろっからの。」

「はい、そうさせてもらいます。この際だから、ここら辺の地形とか建物とか見てきますよ。」

「では、ネギ君の監視及び護衛、頑張ってくれ。」
「わかりました。任せてください。」

こうして俺の麻帆良での生活が始まった。

2話目：入学決定！魔法生徒（後書き）

……おもしろく書けない……><

他の人を見ていると、2話目からはもうイベント入っているのば
っかりなのに……

次回にはクロードがやっと教室入りする、かもです。
力不足な作者ですいません。

次回も読んでやってください。

3 話目：命を狙われた？魔法生徒（前書き）

更新の間隔が定まらない作者ですが、とりあえず読んでやってください。

3 話目：命を狙われた？魔法生徒

俺クロードは今、麻帆良の中を散策している。

今の時間は午後1時ぐらい。荷物が届く時間まで、まだ5時間ほどある。

「にしても広いな……。さすが麻帆良『都市』だな。」

『都市』と呼ばれるほどの麻帆良の広さにただただ感心していた。感心しながらそこらじゅう歩いただけでもう3時間も経ってしまった。

「ふう、とりあえず一通り歩いたかな。これでどこに何があるかは大体わかったな。」

それに、いい暇つぶしになった。

こういうことは、今やつとかないと後々メンドーになるからな。今できてよかった。

俺は、【世界樹】と呼ばれるドでかい木の近く（近くといっても500、600メートルは離れている）のベンチに腰掛けて、後は何をするかを考えた。

「あ！そういうば麻帆良には神社があったな。これからのことを祈つとこ。」

そして神社に着いた俺。

「『龍宮神社』……龍のお宮か、ご利益ありそうだな。」

そう呟きながら、境内のほうへ行くと、何やら人の気配がした。
（なんだ、この殺気。まるで侵入者に対するような……）
そう思った瞬間、どこからともなく弾丸が飛んできた。

「うおっ!？」

紙一重のところで弾丸を避けた。

（実弾だ!?! 間違いなく殺す気じゃないか!）

だが、またすぐに次の弾丸が飛んできた。

俺はそれを避け、弾丸の発砲地点を見つけた。

（あそこか!）

そしてその方向に向かって自前の移動術である【速動術^{ソニック・ムーブ}】で距離を詰めた。

そして、狙撃主に攻撃を加えようとしたとき、

「な、巫女!？」

そこには、巫女服を着た浅黒い肌の女性が、スナイパーライフルを片手に持っていた。

「な、なんで巫女がライフル持ってたんだよ……」

「うるさい。」

そういうと、その女性はそのライフルでさらに撃ってきた。

「ちょ、至近距離はまずいつて!!」

「ごちゃごちゃぬかすな、侵入者!!」

「俺は侵入者じゃない、ここにお参りに来ただけだ!!」

「何？そうだったのか？」

巫女スナイパーの人は、俺が侵入者じゃないことを確認すると、
謝りながらライフルを収めた。

「ふう、死ぬかと思った……。」

「すまないな、見慣れない顔だったものだから、つい。」

「まあいいですよ。とりあえず死ななかつたんだから。」

その後少し話をした。

この人の名前は【龍宮 真名】麻帆良学園中等部の生徒で、クラスを聞いてみると3-Aだと言う。

そして、彼女は魔法の存在を既に知っているらしく、その手の仕事を学園長によく依頼されるという。

「凄いな。他にはそういう生徒はいるの？」

「同じクラスに桜咲刹那というのがいてな、私とよく任務を共にしているんだよ。」

「そうか。少しか、転入するのが楽しみになってきたな。」

「転入？麻帆良に来るのか？」

「ああ。でも学園長がどういう手違いをしたのか、女子中等部の3-Aクラスに転入することになったんだ。」

龍宮さんは、少しの間驚きを隠せなかったようで、それまでの彼女がするような顔ではなくなっていた。

その後、俺はお参りを手早く済ませ、荷物が届く場所へ急いだ。

「荷物を部屋に運び終わって……」

「さうで、これからどうしょ……。」

俺は少し心配になってきた。

クラスの人とは軽蔑したりしないか、
変ないじめみたいなことにならないか、
e t c

「ま、なるようになるか。成り行きでいいや。」

そう決めると、俺は早々と眠りについた……。

「翌朝」

朝6時。

目覚め、最高！

「なんか今日はいいことあるかな？」

なんて他愛のないことを言いながら、とりあえずスーツを着て、部屋を出た。

まだ早いからだろう。全く人の気配がしない。

「そついやここ、女子寮なんだよね……。今でも信じられないな。」

昨日の荷物運びのときに、よく騒ぎが起こらなかったものだと思うた。

まあ起こらないに越したことはないんだが。

「まあとりあえず、行くか。」

昨日学園長が、どうやったのか俺に念話で話しかけてきて、

「明日の7時ごろ、学園長室に来ること。」と伝えられた。

多分そこからネギ君に案内され、クラスに行くんだろう。

朝飯を食べてなかったことを思い出し、コンビニに寄ってから学園長室へ向かった。

〈学園長室〉

俺が部屋の扉を開けると、学園長と高畑さん、そしてネギ君が待っていた。

俺は軽く挨拶をして、部屋の中に入り、扉を閉めた。

「とりあえず君に伝えることがあったの。ネギ君のクラスの生徒についてじゃ。」

「?……ってまさか魔法がばれてる生徒がいるんですか?」

（龍宮さんはいいのだろうけど、他の人が知ってるのはやばいんじゃないのか？）

「そのまさかじゃ！修学旅行が終わったら結構な人数になってしまったんじゃ。」

「リョウメンスクナノカミの事件なら知ってますが、もしやその時に？」

「そうじゃ。だから、その生徒には自分の正体を明かしといてくれるかの？一部の人には事情を知っておいてほしいしな。」

そう言われ、俺は少し考えた。

その生徒たちにも危険が及ばないだろうか。

魔法を知っていたら、そちらのほうに巻き込まれる可能性が高い…。

（こっちのほうにも気を向けとかないとな。）

「了解しました。」

「では、行きましよう、クロードさん。」

「ああ、わかった。」

ネギ君に連れられて、俺は3 - Aの教室に向かった。

3 話目：命を狙われた？魔法生徒（後書き）

……クロードが教室に入れなかった><;
でも、次回は絶対教室入りします。

クロードは3 - Aの質問攻めに耐えられるのか、耐えられないのか、それは書くときの作者の気分ですwww
よければ次も読んでやってください。

4 話目：教室入り！どうなる魔法生徒（前書き）

4 話目にしてやっとですよ。

主人公の教室入り。

では、読んでやってください。 4 話目です……………。

4 話目：教室入り！どうなる魔法生徒

クロードです。

今、私は麻帆良学園中等部3 - Aの教室の外にいます。

「うーん、さすがに緊張してきた……。機関に入るときよりも緊張してるかも。」

俺が機関に入るときは、どんな人がいるのかわからない状態だったからそれはそれで緊張していた。だけど、今は状況が違っている。

この教室の中には、男子生徒皆無の女子しかいないのだとわかってる。

そこに男である俺が生徒として入る。

先生としてならまだわかる。

「（なんで生徒としてなんだよ）……。」「」

この時の状況を簡単に言っておこう。

180cm近くある男が、女子クラスの前で頭を抱えて唸っている。作者の観点で言うと、「とても滑稽」だそうだ。

「じゃあ僕は先に入っていますので、呼んだら来てくださいね。」

「お、オッケー……………」

「顔色悪いですよ？大丈夫ですか？」

「まあ何とか、ははは……………」

ネギ君は不思議そうな顔をしつつも、教室に入るときはいつも通りの笑顔になっていた。

そのあと、教室の中からネギ君と生徒の声が聞こえてくる。

「みなさん、静かにしてください。えと、今日からこのクラスに通うことになる転校生を紹介したいと思います。」

「………転校生!?」

「はい、じゃあ入ってきてください!!」

ついに来た。

来てしまった。

ええい、覚悟を決めろ、クロード・オーウェンス!!

俺は一度深呼吸をして、自分を落ち着かせた。

そして、教室に入っていく。

「失礼します。」

(できるだけ落ち着いた雰囲気で……)

「今日からこのクラスに転入することになりました、クロード・オーウェンスと言います。クラスに馴染んでいけるかわかりませんが、よろしく願います。」

そう言つて頭を下げた。

そして顔を上げる。

見ると、皆身動きしていないようだ……。

(あれ、あんまり反応ない?)

そう思っていると、

「………か………」

「か?」

「『『『『『かつこいい』』』』!!』』』』』」
「な!？」

なんだか知らんが、いきなり騒ぎ始めてしまったのでかなり困惑してしまった。

「ねえ、彼女つているの？」

「は、はい？」

「部活はどこにするの？」

「あの、少し落ち着いてくれませんか？」

俺は制しようと試みるも、全く効果はなかった。

(仕方ないな……)

俺は仕方なしに【あのモード】に移行することにした。

「静まれ〜〜〜〜〜!!」

「『『『『『!』』』』』」

ハ。ー。ポツ。ーのダン。ルドア先生みたいな感じの大声で言った。

「皆の衆、騒ぐでない。質問なら順番にするようにな。」

「『『『『『は、ハイ……』』』』』」

皆啞然としている。そりや当然だろうな。

かつこよく見えた人がいきなり長老みたいな貫禄とか威圧感とか出すんだもんな。

これがさっき言ってた俺の【長老様モード】である。

機関でもたま〜にこれをやって笑いを取ってたりする。

意外とツボる人多いんだよね、こういう芸は。

「あ、驚かせてすいません。えっと、じゃあ……」
「じゃあ質問ある人は手を挙げてください。」

俺がしどろもどろになってたところで、ネギ君が誘導してくれた。これはありがたかった。

こういうことには慣れていなかったものだからな。

「はいはい！」

「はい、ハルナさん！」

「クロードくんてさ、彼女とかいるの？」

ハルナと呼ばれた人が、眼鏡を光らせながら質問してきた。よく見ると、いわゆるアホ毛の部分がピクピク動いている。あの場所はなんかレーダーみたいのがついてんのか？

「いや、いませんけど……。」

「じゃあ、今まで彼女を作ったことは？」

「それもないです。というか、前居た学校は男子校で、女子と接する機会がなかったものですから。」

学校がどうとかっていうのは嘘だ。

が、女性と接する機会がなかったのは本当だ。

俺の機関は何故か男だらけだったからな。

「へえ、じゃあお姉さんたちが女とは何か教えたげようか？」

「歳一緒なのにお姉さんとか言わない。他の人は質問ありますか？」

ハルナさんの発言は危ないと察知し、テキトーに流し、他の人に話を向ける。

「拙者が質問してもいいでござるか？」

そう言って手を挙げたのは、糸目のおっとりしてそうな人だ。
(でも、結構気を感じる。常人の域は超えているのかもな。)

「ええ、大丈夫ですよ。えっと、名前は？」

「長瀬 楓でござる。楓でいいでござるよ。」

「わかりました。で、楓さんはどんな質問ですか？」

質問の内容が気になるので、聞いてみた。

だがその質問は、いつか聞かれるであろう質問であつた。

「なぜ男子であるクロード君がこの女子クラスに来たのか、でござるよ。」

「それは、学園長先生から聞かされたんですが、男女共学の予行演習として、転入してきた僕を試験的に女子クラスに入れさせたいです。問題がなければそのまま。問題があるのであれば男子クラスのように移動、なんだそうです。」

とりあえずそういうことにしといた。

学園長が言つてたごまかし方をそのまま使つてみたけど、大丈夫かな？

そう思っていると、

「質問終わったアルか？なら次は私の質問に答えるヨロシ！」

楓さんよりかなり背の低い中国人さんが質問してきた。

そういえばネギ君がクーフエイっていうクラスの強い人に弟子入里したとか言つてたけど、この人のことかな？

でも、楓さんはいいいのかな？まだ質問しなくても……

「楓さんはもういいんですか？」

「もういいでござるよ。」

あ、いいんだ……。

なら、中国女子の質問に答えないと。

「わかった。では君の質問に答えよう、何についてかな？」

「お前、強いアルか？」

「え？」

いきなりなんだ？強いか、だって？

まあ近接戦闘の訓練とか機関でやってたから強いとは言えるんだろ
うけど。

機関の人はあれさえやれば絶対強くなるって言ってたし。

「ええ、多分。人と勝負したことがあまりないから確証はないです
けど。」

「なら、今日の放課後、世界樹前で私と手合わせするアル！」

血の氣が多いな、この子は。

まあ元気なのはいいことだけだね。（って、なんかオヤジ臭いな、
俺。）

「ええ、別にかまいませんよ。あまり期待はしないでくださいね。」

なんかいきなり勝負をすることになっちゃったな。

でも、最近戦闘してなかったから勘を取り戻すにはいい機会かな。

「じゃあ他、質問あります？」

ここから、また結構質問があったけど、長くなるので省略する。

省略しないでそのまま書くと、1話分くらいの長さになりそうだし、まあどんな質問されたかというと、

- ・部活は何に入るのか
 - ・前の学校はどんな感じだったか
 - ・彼女を作る気はあるか
 - ・住む部屋は決まっているのか
- などなど…………

軽く20くらいは質問された。

よくぞまあこんなにポンポンと出てくるもんだ。

すべて答え終わった俺は、誰かと戦ってたほうがマシっていつくらい疲れた。

今日はぐっすり眠れそうだな。

そして、最後に俺の席はというと、

「それじゃあ一番後ろの席に座ってもらいますね。」

そう言って促されたのは、長い金髪の小さな女子の隣だった。席に座って一息つくと、隣の金髪っ子が話しかけてきた。

「お前、あまりうるさくするなよ。私は学校などうんざりしているんだからな。」

「大丈夫だって。俺もサボリ願望が高いほうだから。」

そう言いながら隣の子の顔を見る。すると、なぜか思った。
(あれ、この人、誰かに顔つきが似ているような……………)

「なんだ、顔をジロジロ見るんじゃない。」

そう言われながらも、ちよつとの間記憶をたどっていると、ある人物の顔によく似ていることに気がついた。
(まさか。いや、でも情報では【登校地獄】って呪いをかけられて日本の学校にいるってなつてたっけ…………)

「えと、人違いなら失礼なんだけど、もしかして、エヴァンジェリンさんでしょうか？」

「？よくわかつたな。この変装術には自信があつたんだがな。」

やっぱりそうだ。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

真祖の吸血鬼で、悪の魔法使い。

闇の福音・禍韻の使徒・人形使いなど、様々な呼び名で恐れられている魔法使い。

そして、俺はこの人に密かに憧れている。

「貴様のことは学園長^{ジジイ}から聞いたよ。坊やの監視・護衛なんだつてな？ご苦労なことだよ。」

あれ、聞いてたんだ。

そういえば、エヴァさんはただココに通学してるだけなのかな。多少気になつたので聞いてみる。

「あの、聞きたいことがあるんですけど、いいですか？」

「別にいいぞ。なんだ？」

「エヴァさんはここで何かしらの仕事みたいなことはなされてるんですか？」

「ああ、この学園の広域警備をしている。侵入者を発見して、始末している。」

「し、始末、ですか．．．。」

「お前もやるか？」

「やってもいいのでしたらやりますよ。あまり戦闘をしないでいると、体が鈍ってしまいますからね。」

「ふ、ならジジイにでも相談するといい。警備くらいやらせてくれるだろう。」

そういうと、授業が終わるまで起こすなと言って眠ってしまった。

「……………今夜、相談しに行こう。やるなら早いうちからのほうがいいし。」

そう呟きながら、俺も眠りについた。
本当は眠っちゃいけないんだけどね。

4 話目：教室入り！どうなる魔法生徒（後書き）

そつえば最初のほうにプロローグとかオリキャラ設定みたいなのを書くの忘れた><;

とりあえず次はクロードのキャラ設定を書こうと思います。（中途半端なところですいません……）

放課後の話とかはキャラ設定の次になります。

お楽しみに～（・@・）ノシ

4・5話目：魔法生徒の設定！（前書き）

今回はクロードのキャラ設定についてです。

色々とお水な設定があるかと思いますが、

そのようなところがあっても見て見ぬフリでお願いします。

4・5 話目：魔法生徒の設定！

【クロード・オーウェンス】男 15歳

1988年7月28日生まれ O型 しし座

2000年度メルディアナ魔法学校卒業生（首席）（ネギは2003年度）

魔法の系統は得意順に火・闇↓光↓風↓水↓氷↓土。魔法の射手では全ての系統で撃てる。サギタ・マギカ

戦闘スタイルとしては、自分で編み出した肉体強化魔法【混沌の合カオス唱】で自身を強化してから戦うときと、気のみで戦うときがある。これは、気は使えるがまだ魔力とは併用するほどの技術はないためである。

気だけで戦うときは、気弾を放てる・か。か。波みたいなのが撃てる等あるため、魔力のときと力はそれほど違わない。

魔法学校時代は筆記、実戦成績共にトップクラス。ネギとは一度実戦訓練でペアとなったときに親しくなった。

魔法学校時代は女子に人気だった（ただクロード自身はそのことを知らない）が、それに嫉妬した連中にいじめを受けたこともある。

卒業後の修行として魔法機関に配属。

その後は普通世界と魔法世界を行ったり来たりして数々の事件に関わった。

高畑・T・タカミチとはその数々の事件のうちのひとつを共に鎮圧した際に知り合った。

ちなみに弱点は、【虫】である。

弱点といっても、逃げ出すとかそういうことではない。

虫が大嫌いなクロードは、虫を見るとショックのあまり魔力が暴走し、狂戦士^{バーサーカー}と化してしまい、クロードではなくなってしまう。その間のことはクロードの記憶には残らない。

小さい虫ならまだ極度に怖がるだけだが、大きいものになると暴走してしまう。

現実世界には大きい虫はさほどいないので、なるとすれば魔法世界にいるときぐらい。

では、実際にそうなった事件のことをちょっと話そう……………

〈魔法世界・砂漠地帯〉

「ここら辺が巨大生物の現れる場所か……………」

そう言いながら、クロードは辺りを見回す。

この時クロードは機関より【正体不明の巨大生物の調査及び個体の持ち帰り】という任務を受け、単身でここにきている。

といっても、他の仲間は遠くにいて、終わったら連絡して来てもらうようになっている。

「まあ正体不明って言っても、ハイエンシェントドラゴン古代龍みたいなものじゃないって話だし、俺一人で何とかなるでしょ。」

そうクロードは思っていた。

クロードが余裕の表情を浮かべていると、いつしか地震のような揺れが近づいてきた。

「お、ようやく来たな。どんなのかは知らないけど、俺の新作魔法の餌食……………に……………」

クロードは出てきた巨大生物の姿を見て凍りついた。

出てきた生物はさながらムカデのよう。

ただデカさがとんでもない。全長が100〜150mくらいはある。しかも触角が4本頭の上と下に2本ずつ生えている。

足も一本一本が長さ5・6m、直径2mあり、それが巨体を支えるために数百本ある。

さらに口元には地中を掘り進むためのものなのか、蟻にしているようなようなドでかい顎がついている。

こんなのは誰が見ても凍りつくような光景だが、クロードは違う理由で凍りついている。

「む……………む……………虫だ……………!!」

ドでかいムカデを見たクロードは、大絶叫した。

「虫はイヤだ虫はイヤだ虫はイヤだ虫はイヤだ虫はイヤだ虫はイヤだ虫はイヤだ虫はイヤだ虫はイヤだ虫はイヤだ」

某アニメの碇シ。ジのような感じになりながら、クロードの魔力がどんどん膨れ上がっていく……。

そして許容量を超え、クロードは意識が制御できなくなってしまう。クロードの体が、だんだんと変化していく。

肩甲骨の辺りから黒い荒れた翼が生えてくる。

長く強靱な尻尾が生えてくる。

そして体全体が赤黒くなり始め、肉質が硬くなる。

体が肥大化しているのか、服が破けていく。

「グオオオオオオオオオオー！！！」

天を仰ぎ吼えた途端、全身が熱せられた金属の如き輝きを放った。そして地面は震え、バーサーカー狂戦士と化したクロードを中心に地割れが起る。

その姿は言葉で表すなら【**紅き悪魔**】
レッド・デーモン

(モンス。ー・ハ。ターのミ。バル。ンをご想像ください)

クロードは先ほどのドデカムカデに右手を向け、

「消滅の獄炎」

そう唱えた瞬間、ドデカムカデは燃え上がり、その巨体が数秒しないうちに消え去った……。

その燃えた場所には燃えカス一片たりとも残ってはいなかった……。

ムカデが消え去って数秒すると、クロードは元の姿に戻り、そのまま倒れた…………。

その後、クロードの仲間が見つけて本部に連れて帰ったが、そうだったのはクロードが倒れてから数時間後であった。

こんな話のある設定です。

とりあえずこの話は誰も知らない黒歴史、になっています。

こんな設定で、これからやっていこうと思います。

どうぞよろしくです。(・ω・)ノシ

4・5 話目：魔法生徒の設定！（後書き）

……よくよく考えたら、

中二設定だな……orz

すいません、こんな設定しかできない作者ですww

こんな作者でもよければ、読んでやってください……

精一杯努力します。

5 話目：魔法生徒、戦う（前書き）

やっと5話目にきました。

原作で言つと、7巻の辺りです。

うまく書けたかわかりませんが、読んでやってください。

5 話目：魔法生徒、戦う

「……………さん……………ードさん……………」

「うみゆ……………もう少しだけ寝させて……………」

「起きてください、クロードさん!!」

「うお!?!」

俺は聞き覚えのある声に起こされて、飛び上がった。

「うわあ!!」

聞き覚えのある声、ネギ君がなぜかは知らないがずっとけている。
ああ、俺が倒しちゃったのか。

「ゴメン、ネギ君。けがしてない?」

「大丈夫です。それより、寝てないで下さいよ、もうLHRですよ」
ロング・ホーム・ルーム

「へ?あれ、俺そんなに寝てたのか……………」

「落ちてないでください!!」

ネギ君が怒鳴った瞬間、ほかの皆が笑い始めた。

まあ仕方ないか。寝てた俺が悪いんだし。

ふと隣を見ると、エヴァンジェリンさんはフフと笑っていた。

(ああ、楽しんでたな、この人。)

そう思ったが、口には出さずに俺も笑った。

「ゴメンゴメン。明日は寝ないようにするよ。」

「もう、ちゃんとしてくださいよ。」

そういうと、ネギ君は教台に戻り、LHRを始めた。

「お前、気持ち良さそうに寝てたな。寝顔の変化が楽しめたぞ、クク……」

「見てたんですか！？他人にはあまり見せないようにつつぶせになつて寝てたのに……」

「何だ、寝顔が見られるのは嫌いなのか？」

「誰だってそうだと思います！！」

そうこうしていると、LHRが終わったらしく、騒がしくなり始めた。

「クロード、早く世界樹のところに行くアルヨ。」

「ああ、わかった。えと、名前はなんて言つたっけ？」

「^{クイフエイ}古菲言つネ。あと、ネギ坊主も来るアルヨ。」

ネギ君も？なんでだろう、ネギ君見に来るのかな？勝負を。

いや、もしかして……

「ネギ君が武術習い始めたつて言うけど、もしかして君に？」

「その通りアル。強くなりたいと言てたからネ。」

「そうか。ネギ君は強くなったのかな？」

「まだ教え始めて1日くらいしか経ってないからネ、まだまだアルヨ。」

「なんだ、そうか。まあいいさ。じゃあ行くか。世界樹、だったか？」

そうして、俺と古菲、それとネギ君や他の人と一緒に世界樹に向かった。

世界樹に向かうメンバーの名前を聞いてみた。

俺と古菲とネギ君以外は、神楽坂・近衛・桜咲の3人だそうさ。
ネギ君にこっそり聞いてみたが、古菲以外の3人は魔法については
熟知しているそうさ。

雰囲気からして、近衛はほよほよしてる感じで多少心許ないが、神
楽坂と桜咲は安心できそうさ。

そんなことを考えていると、世界樹に着いた。

「で、デケエ……」

世界樹と呼ばれる木を初めて間近で見て、思ったことがつい口に出
てしまった。

「ネギ坊主の稽古の前に、勝負アル！」

「え？ ああ、オッケー。いつでもどうぞ。」

「ねえ、大丈夫なの？ 古菲、強いわよ？」

俺が気持ち構えていると、神楽坂が話しかけてきた。

「まあ大丈夫だと思うよ。一応それなりに戦えるように訓練してた
から。」

「訓練？ 何だよ？」

「その説明は後ですよ。とりあえず、下がって。」

「あ、うん……。」

神楽坂に下がってもらい、俺は古菲を見た。

「正々堂々、全力で行くよー!!」

「こっちも同じアル！」

俺も古菲も構えをとった。

とはいっても、俺は今まではほとんど構えをとったことがなかったから、テキストに構えた。

（いつも構えとってるヒマなんてないような戦闘しかしてこなかったからな。知ってるの真似しよ……）

俺は、ボクサーの構えになってた。

古菲はというと、足も腕も交差させたような中国拳法独特の構えをとった。

「おもしろい構えだな。」

「なめてかからぬほうがいいアルヨ。」

「そんなことするわけないさ。全力の勝負だ、楽しまなきゃな。」

「準備はいいですか？では、始めてください！」

試合の合図をネギ君にやってもらって、始まった。

（ここからは3人称視点）

合図の瞬間、クロードは気を使って瞬時に移動、飛び回し蹴りを繰り出す。

古菲はそれを難なくかわし、肘で打撃する。

クロードはそれを手のひらで受け止め、一端距離を開けるために後ろへ飛び退いた。

「凄いな、今のカウンターは貰ってたら危なかったよ。」

「まあネ。でも、クロードも凄アルよ。」

「それはどうも。気を使っではいけないかと思っていたけど、君なら多分大丈夫だね。」

「クロード、気を使えるアルか？」

古菲は驚いたようだった。仕方ないと言えば仕方ない。

ただの転校生が、気を使えるなんて、驚かない方がおかしいだろう。

「だから、今までののは【気を使わない本気】これからは【気を使った本気】。行くよ!」

そう言っつて、クロードは力を体全体に入れる。

すると、クロードから常人でも分かるような気のオーラが出てきた。

「さあ、行くよ!」

瞬間、クロードが消える。そして、古菲の後ろに現れ、手刀を繰り出す。

このクロードの動きを目で追えたのは、桜咲刹那ただ一人だった。

古菲は、咄嗟に腕でその手刀をガードする。

しかしその後、古菲の背中から風が吹き抜けた。

古菲の鳩尾には、寸止めされたクロードの拳があつた。

「……………私の……………負けアルね。」

古菲は潔く負けを認めた。

〓クロード視点〓

古菲との組み手を終えた俺は、その場に座り込んでしまった。

仕方がないだろう。疲れてたんだから。

「ふう、疲れた。」

「あれだけの組み手でもう疲れたアルか？だらしないアルね」

「いやね、気を使えると言っても、まだ効率的には使いこなせてないんだよ。だから、どうも燃費が悪くなっちまうんだ。

俺ももつと修行しなきゃな。」

古菲は呆れながら、ネギ君との修業に移って行つた。

呆れられてもなあ……………。

気は最近になってようやく使えるようになった力だから仕方ないんだよな。

と思いながら、古菲とネギ君が組み手をしているところをぼんやりと眺めていた……………。

すると、誰か他の人が近づいてきた。

「ネギく〜ん、お弁当たくさん作ってきたよ〜！」

「ん？あれって同じクラス、だっけか？」

「あれ、クロード君もいたんだ。」

「おまけみたいに言うなよ……………」

「あ、ありがとうございます！まき絵さん！！！」

今来たのはまき絵っていうらしい、あと一人後ろから同じような重箱抱えてるのがきた。

「あれ、クロード君もおったんや。」

「あんたまで俺がおまけみたいに言っ……………。えと、名前なんて言っただけ？」

「あれ、言っってへんかったっけ？和泉亜子っていうんよ。よろしゅ

うな。」

「ああ、よろしく。まき絵さんに付き合わされたの?」

まき絵さんやネギ君が小太りだのガリガリだのやってるとき、俺は和泉さんと話してた。

「同じ寮部屋やし、手伝ってやらんと。私もネギ君は少し心配やつたし。」

「そうなんだ。でも、重箱はやりすぎじゃないかな……。」

「私もそう思ってたんやけどな、まき絵がめっちゃはりきって、止められなかったんよ。」

和泉さんを少し見ると、多少疲れたように見える。少しねぎらいの言葉でもかけようかな。

「ああ、それは仕方ないな……。お疲れさんだね。」

「せやな。ここまで来るんに結構疲れたわ。」

「俺も、古菲と勝負したから疲れたよ。」

「あ、クロード君とくーふえ、ほんとにやったんや。どっちが勝ったん?」

「とりあえず俺が勝った。でも古菲は強いよ……。」

「勝ったんや!? クロード君強いんやなあ……。」

「まあね。それでさ……。」

俺はそれから和泉さんと結構話した。

芝生の上に座って。

他愛のない会話。

でも、俺にとっては結構な快挙。

女子と二人で長時間話す。

こんなことは、生まれてからこのときまで一度も経験したことがな

かった。

だから、自然に話せてた自分が信じられなかった。

.....

まあそんなわけで、日没の時間辺りで古菲たちと離れ、学園長室に向かう。

なぜかと言えば、警備の仕事について相談しに行くからだ。

「さて、警備の仕事やらせてくれるだろうか……。」

そんな不安を持って、俺は学園長室に向かった……。

5 話目：魔法生徒、戦う（後書き）

………戦闘シーンうまく書けねえorz
精進します。

今後ともよろしくです〜^^ノシ

6 話目：頼んだり料理したり魔法生徒（前書き）

ども、やっと6話目です。

とりあえず、どうぞ……

6 話目：頼んだり料理したり魔法生徒

「警備の仕事をしたい、とな？」

「はい、そのために来ました。」

ども、毎度おなじみ、クロードです。

今、学園長室にて、警備の仕事について学園長に頼んでいるところです。

この部屋には、今は俺と学園長の2人しかいません。

「後々ここに慣れたところに頼もうと思っていたんじやが、まさか自分から志願してくるとはの。」

「じゃあ、いいんですか？」

「じやが、内容については分かっておるのかの？」

「学園内の見周りと、侵入者がいた場合はその対処、ですよね？」

実際そうでなくともやるつもりだけどね」

「大体は合つとるが、役割はもうひとつある。」

もうひとつ？何だろう……人外の排除とかかな？機関でもそういうのあつたし……。

「もうひとつは、ここを狙う『術者』が召喚してくる『鬼』を排除することじゃ。」

「鬼？それってどういうやつですか？」

「まあ簡単に言えば魔法世界で言う魔物みたいなものじゃ。魔法世界のそれより多少レベルは低いんじやがな。」

へえ、魔物の劣化版みたいな感じか。なら俺でも大丈夫かな。

「それなら平気、かな。機関にいた時も、魔物は何回も相手にしてきましたから。」

「そうじゃったか。それなら安心じゃな。では、警備の仕事、やってくれるかの？」

「はい、もちろん！」

警備の仕事をやれば、学園の人を守れる。

そうすればネギ君を助けることにもなる、はず。

それに俺の実践訓練にもなる。

一石二鳥、または三鳥！効率的だ。

「まあ、毎日というわけにもいかんからの。週に1回ほどで良いからの。」

「え？あ、そうですか……。わかりました。では、いつやればいいですか？」

「そうじゃな……とりあえず今日の深夜0時、世界樹のところに集合してくれんかの？そこでまたやる日などを決めるとしよう。」

「わかりました。じゃあ一旦部屋に戻って休んできます。」

俺はそう言って部屋を出て、自分の寮部屋に向かった。

（寮部屋前）

俺が部屋に行くと、何やら人がたくさんいた。

「ん？あれって……」

そう、同じ3 - Aの連中だった。

ネギ君達と別れる前にクラス名簿を見させてもらったから大体の名前は分かった。

朝倉、柿崎、釘宮、椎名、長瀬、鳴滝姉妹……多いな。

「あなたたち、そこで何をしているんだい？」

「あ、クロード君。やっぱここが君の部屋だったんだね？」

そう言ってきたのは、朝倉だ。

てか、なんで分かったんだ？まだ誰にも言っていないはずなのにな……。

「なんで分かったんだ、とか思ってるでしょ。」

「え？」

な、何故分かった？こいつ、読心術を心得ているとでもいうのか！？

「あたしのことをなめてもらっちゃ困るね。麻帆良パラッチのあたしにかかれば、どんなことも丸わかりなんだから。」

「な、なんて恐ろしい奴……」

こいつは注意しといたほうがいいな……。

あ、そういえばこの人も魔法について知ってるってネギ君言ってたっけな。

事情を知ってるなら、多少は安全かな。

「それよりクロード君、君の部屋にお邪魔させてもらってもいいか

な？」

柿崎が申し立ててきた。まあ、部屋の中くらいいいかな。

「別にいいけど、ちょっと待ってて。結構散らかってるからさ。」

「分かった。どのくらいかかるの？」

「まあ2、3分待っててもらえばいいよ。すぐに片付くから。」

そう言って玄関先で待ってもらい、俺は部屋の中に入った。

「さて、と。一晩過ごただけですいぶん汚れたな。きれいにしないと。」

掃除に取り掛かる。

といつても、ひどいのは主にキッチン。

それ以外はまあまあきれいだったので、キッチンを終えた後は箒で少し掃いて終わらせた。

「よし、これでいいな。入ってきていいよ。」

「おっじゃまつしまゝす!!」

鳴滝姉妹が勢いよく入ってきた。

鳴滝姉妹は、本当に中学生なのだろうか……。その疑問が朝のH

Rからずっと頭に残り続けてる。

他は部屋を見回している。

見られて恥ずかしいようなものはないのだが、なんか落ち着かない。

「クロード君って、一人暮らしなんだね。」

「まあね。男子寮だったら他に誰かいただろうけど、ここ女子寮だしね……。」

正直、女子寮にいるという事実をまだ受け入れきれて無いんだよね……。

「女子寮は不満？」

「いや、不満はないよ。ただ落ち着かないな〜って思ってるだけ。」
「あれ、クロード君、女の子に興味があるのかな〜？」

朝倉が不敵な笑みで言った。
なんか変に聞こえるな……。少し怖い。

「そんなんじゃないって。それより、こんな時間だし、夕飯食べてくかい？」

「『え、いいの？』」

「おう、せっかくだから、作ってあげるよ。」

ケチな人って思われたくないからね。

「クロード君、料理作れたんだ？」

「ああ、前いた中学も寮制だったからね。よく作ったんだよ。」

これも嘘設定。

ホントは機関で下っ端が炊事するってことだったからよく作らされた。って話。

で、まあ色々作った。

白身魚のフライとか、シーザーサラダみたいのとか、結構庶民的なメニューになった。

作ってる間、他の皆さんはかなりはしゃいでいた。

最近の女子中学生は元気すぎるくらいだな……。

おつとまたオヤジ発言しちゃったよ。俺まだ15歳なのにな。

「自分なりにはうまくできたつもりだけど、どう？うまいかな？」

「クロード君君すごいよ、申し分なし！」

そう釘宮が言った後にも、皆絶賛してくれた。

「よかった。頑張って作った甲斐があったよ。」（ニコッ

（ドキッ）↑クロード・楓以外全員

ん？気のせいかな？今ドキッって音が聞こえたような…………。

「（ねえ、クロード君ってさ…………）」

「（うん、やっぱり…………）」

「（彼氏にしたいくらいカッコいい！）」

「そう呟いたのは柿崎、釘宮、椎名であった。

しかし、クロード本人には聞こえておらず、ただ首をかしげていた。
（三人称ナレーション）

そうして俺は朝倉たちに夕飯を食わせた後、さっさと部屋に帰らせた。

あまり長居されると休めなくなるし。

「さて、劣化版とは言え、相手は魔物の一種。腕輪つけてくか…………。」

「そういつて、俺は押入れの奥底にしまっておいた腕輪を探し出し、つけた。」

これは前一度出てきたきり全然触れられてなかった腕輪（2話目を参照）とは違う腕輪だ。

何が違うと言えば、入っている中身。

前の腕輪には生活用品とか食べ物とかが入っている。

対して今見つけ出した腕輪には、マジックアイテムや武器が入っている。

そのため、機関で任務に就くときは、いつもこの腕輪をつけている。

そうこうしているうちに、もう夜中の11時になってしまった。

「あれ、あまり休めてないんだけど……まあいいや、とりあえず行くか。」

愚痴をこぼしながら、世界樹に向かった。

「深夜0時・世界樹前」

「今日からクロード君にも警備の仕事をしてもらうことになった。」

「よろしくお願いします。分からないことが多々ありますので、色々教えていただけると幸いです。」

俺以外の警備の人皆が各々「よろしく。」と言ってくれた。

そうして自己紹介を軽く済ませ、大まかな見周り場所を覚えてもらった。

俺は女子中等部校舎の周りと、女子寮周りの担当となった。

見周りは基本単独で行うものらしい。効率化、だそうだ。

まあ学園の面積がばかでかいから仕方ないと言えば仕方ないのだが……。

分担場所を確認して、各々見周りに向かった。

これから、俺の麻帆良での初警備が始まる。

6 話目：頼んだり料理したり魔法生徒（後書き）

部屋に遊びに来た人がなぜあの面々……orz

てか楓さん全く喋ってない……orz

まあとりあえずこれもありかな（え

次回は鬼と戦います。

多分、まあクロードの圧勝でしょうが……。

よければ次回も読んでやってください……。

7 話目：初警備仕事！魔法生徒（前書き）

ども、最近書くペースが遅くなりました。
でも、2週間に一度は更新しようと思っています。
では、どうぞー！

7 話目：初警備仕事！魔法生徒

「深夜0時30分頃」

「ふああゝ、警備も意外と退屈なんだな。」

クロードは欠伸をしながら感想を言う。

今クロードは、女子寮近くにいる。

ただ、何も異質なものは感じられず、つまらなそうにしている。

「30分しかたつてないけど、ここまで何も感じられないなんて・・・拍子抜けだな。」

と愚痴を言った瞬間、何やら気が感じられた。

「これは、召喚の時の気の感じ・・・距離はそう遠くはないな。」

この気を感じたことでクロードのさっきまでなかったやる気は急上昇。

鬼たちが召喚されたことをちよつとばかり喜んでいる。

「こういうことは喜んじゃいけないんだろうけど……」

そう言いながら【ソニック・ムーブ速動術】のための力を溜める。
しかも最大出力近くまで。

「うれしいんだから仕方ないよな！」

そう言った瞬間、^{ソニック・ムーブ}【速動術】が発動される。
そして、クロード自身の速度は音速を超えた。

そして、すぐに気を感じた場所へと着いた。
そこは女子寮からそう遠くない森の真ん中で、木がなく広場のようになっている。

今その広場は鬼で埋め尽くされている。

「召喚主はどこにいる？どこだ！」

召喚された無数の鬼たちは見えるが、それらを召喚した者が見つからない。

ふと、鬼たちの向こう側に、召喚主らしき人影が見えた。

「いた！」

しかし、もうその人影は見えなくなり、かすかに感じていた気配がすぐに消えた。

「ちっ、逃げられた。」

悔しがっていると、鬼が一匹、クロードに攻撃を仕掛けてきた。

「おわ！っと、危ない危ない……。」「

クロードはほとんど鬼が見えていなかったため、紙一重で避け、ひと飛びで鬼の群れから離れる。

「それにしても、すごい数の鬼だな。さっきの召喚主、相当の実力を持っていたみたいだ。」

そう言つて改めて鬼の群れを見る。

でかいのから小さいのまで、様々な種類の鬼が見える。

「鬼つてのにもいろんなのがいるんだな……。」

ここでクロードは考える。

この事を他の人に伝えるか否か。

普通に考えれば伝えるべきだろう。しかしクロードは……

「伝えるとすぐに他の人が来て一人で戦えなくなるよな……。」

なんてことを言っている。

「腕試しとして一人でやりたいし……。よし、まだ慣れてないけど、結界を張ってみるか。鬼たちが逃げてもいけないし。」

そしてクロードは結界を張る為に詠唱を始める。

「デスペル・アウロス・クリューソス……来たれ雷の精、磁力を纏いて、我らを覆い他者の侵入を阻め。結界術・磁場雷方！」

発動した瞬間、雷を纏った磁力の壁がクロードと鬼の群れを大きな立方体となって包んだ。

この結界は、本来は中にいる者のみが見えて外の者は見えないはずなのだが、まだクロードがこの結界を張ることに慣れていないため、結界の場所が丸分かりになってしまう。

しかし、この結界は他の結界に比べてかなり頑丈で、貫通性に特化した術等を使わない限りは破られることはない。

「これで周りに被害が及ぶことはない。思いっきり暴れられる……。」

「

そう言いながら、クロードは右の腕輪に念を送る。

（来い、カオスブレイド一刃の混沌！）

その瞬間、クロードの目の前に大剣が現れた。

その大剣は見慣れない形状をしていた。

柄の部分はいたって普通だが、刀身は真紅と黒が螺旋していて、何か禍々しいものを感じさせる。

クロードはそれを片手で掴み、肩に担ぐように持つ。

「ざっと600体か……。修業だと思えばいいか。」

言いながら、鬼の群れに【速動術】で突っ込んでいく。

「がっかりさせないでくれよー！」

クロードVS鬼の群れの始まりである。

〈同時刻・学園長室〉

学園長室には、学園長、エヴァ、茶々丸がいた。
学園長とエヴァは、囲碁をしている。

茶々丸が起こった魔力に気づき、その詳細を学園長に報告する。

「学園長、鬼の大量召喚を確認しましたが、その後何者かがそれら全てを結界内に閉じ込めました。」

「結界じゃと？それはどこじゃ？」

「女子寮からそう遠くない森です。」

「女子寮……じゃと？……もしやとは思うが……」

近衛近右衛門の脳内にひとつの仮説が立った。

（その結界を、クロード君が？）

エヴァを見ると、エヴァは我関せずみたいな表情をしている。

「お主はなんとも思わんのか？」

「結界に閉じ込めてるのなら安全だろう。どうせクロードが一人で戦いたいがためにやったに違いないさ。だから、わざわざ行く必要もない。」

エヴァの言っていることは全て真実、間違いなど一つもない。
しかし、近右衛門は呆れている。

「しかしのう、万が一のことがないとも言えんじやろう。」

「あいつは平気だ。鬼がどれだけ束になったって、あいつにはかな

わんだろつさ。」

「何故そう言えるんじゃ？」

近右衛門は問う。

なぜ対して接してもいないエヴァがそう言えるのか。

エヴァの答えは、こうだ。

「あいつの目を見て魔力と気について分かった。あいつは魔力の量は平均以上程度だが、扱う精神力が半端ないくらいある。それに、気も相当な量だ。鍛錬を高密度でしてきたのだろつ。タカミチとやらせたらどっちが勝つか分からんだろつな。」

一日隣の席にいただけなのに……。

そう学園長は思った。

「ま、私は『勘』でそう思っただけで、それを茶々丸が確証したんだがな。」

それなら納得だ、とばかりに学園長は頷いた。
だが、学園長はそれでも心配だった。

結局学園長はその結界の発生場所の周りに5・6人ほど配置するよう指示した。

『万が一の事態に備えて』という感じだ。
だが、学園長はのちに知る。

この心配は意味のないものだった、と。

7話目：初警備仕事！魔法生徒（後書き）

クロードの詠唱部分はオリジナルです（^^）；
なんか変な展開になっています。あまり原作のイベントに入れて無
いし……。

中途半端なところから始めたことを後悔しています。

次違う作品を書くときはちゃんと最初のところから書くつもりです。

読んでくれてありがとう！

8話目：VS鬼決着！魔法生徒（前書き）

どうも。

更新ペース落ちたあああああOTL

次はもう少しはやく更新できたらいいなあと。
心の隅で思ってます。（涙目

では、8話目どうぞ。

8 話 目：VS 鬼 決 着！魔 法 生 徒

「吹っ飛ばえ！」

力を込めて大剣を振り上げる。

その一撃で20体ほど吹っ飛ばされ、還った。

クロードはもうかれこれ一時間は戦い続けている。

しかし鬼の数が多すぎて、なかなかケリがつかずにいた。

「くっそ、そろそろ気がヤバイ感じかな。でも今まではここまで長くはやってなかったし、扱いが上手くなった証拠かも。」

言いつつ、鬼の攻撃をいなしていく。

最初こそ全ての攻撃を避けてはいたが、途中でそれは効率が悪いと分かり、カウンターに移行している。

しかしそれでも体力の消耗は続き、鬼を倒すペースが落ちてきていた。

「まだ200近くいるのか。正直甘く見てたな、鬼と言うものを。」

目を閉じる。

「今更な気もするけど、魔法、使うか。」

雰囲気が変わる。しかも凄まじい殺気を帯びたものに。そして、クロードの性格も変わる。

「さあ、楽しい楽しい、蹂躪タイムの始まりだぜ！」

言うなり鬼に突っ込んでいきながら詠唱を始める。

「デスペル・アウロス・クリューソス、謳え混沌、鳴り響け終焉の
コーラス・オブ・カオス
序曲、混沌の合唱！」

詠唱を終えた瞬間、クロードを黒い光が包む。すると、クロードの速度が倍以上になる。鬼たちの真ん中に移動し、大剣を構える。

「円渦斬！」

剣を水平にして、一回転する。

ただそれだけで、50程の鬼が吹っ飛んだ。
さらにクロードは詠唱を始める。

「契約に従い、我に従え、炎帝、暗闇の王、来たれ、焼き尽くす業火、喰らい尽くす暗黒、ダークフレイム『暗黒の炎』！」

剣先を地面に突き刺す。

その剣先から、黒い炎が放射状に放たれる。

その炎に触れた鬼共は一瞬にして燃え尽きた。

危険を察知して跳んだ鬼もいたが、もう10体程しかいなくなっていた。

しかし、この鬼達は今までの鬼よりは強いようだ。

「ふむ、お前らは楽しめそうだな。」

「儼らも久しぶりに喚ばれたが、こんなに強い奴は初めてじゃわい！」

鬼の一人（？）がそう言う。

「だが、こっちはもう終わりにしたい。何せもう眠くてな。」

「儼らはもう少し居りたいんじゃないや。じゃから、粘らせて貰うでえ。」

クロードは呆れ、ため息をつく。

（もう寝たいんだから粘らないでよ）（涙）

本心はこうだが、顔には出さない。

「速攻で終わらす。さっさと終われよ！デスペル・アウロス・クリ
ューソス…契約に従い、我に従え、炎獄の王、風帝。来たれ、燃え
上がる業火、吹き荒れる嵐・・・」

剣を掲げる。

その剣に炎と風の力が集まっていく。

「・・・ストーム・プロミネンス
剛炎の嵐！」

力を纏った剣を振り下ろす。

その剣からは炎を纏った嵐が打ち出された。

その嵐は鬼たちを瞬く間に包み込み、そして、還した。

「ふう、ようやく終わったか……………」

鬼がいなくなった森の真ん中で、クロードは結界を解いた上で呟い

た。

ただ今の時刻、午前2時。

クロードに忍び寄る睡魔はもはや抗うことのできないくらい強いものになっているわけで、

「……早いとこ学園長に報告して、寮で寝るか。今日の学校は休むかな……ふあああ……。」

学園長への報告を終え、寮に着いたときはもう午前4時になっていた。

「まったく、学園長は……あんなにごちゃごちゃと質問しなくてもいいだろうが……。」

報告の際、クロードは今回起こったことについて質問の嵐を食らった。

まあこれもクロードの自業自得なわけなのだが。

「こんな時間になっちゃったし、早く寝ちゃお。ふあゝ……ん？」

寮の玄関近くに行くと、人影が見えた。

その人影には見覚えがあり、それを見たため多少目が覚めた。

「あれは、佐々木？」

そう、佐々木まき絵である。

クロードは声をかけた。

「おゝい、佐々木ゝ！」

「あれ、クロード君じゃん。どうしたの？こんな時間に？」

「ああ、ちよつとばかり運動をね。（まあ嘘だが）佐々木こそこんな時間にどうした？」

「これからネギ君と一緒に朝練するんだゝゝ」

ネギ君と朝練……ね。

「目的に反してかゝなりおめかししてる様に見えるけど？」

朝練と言っておいて、デートにでも行くかのような感じだ。正直言って、可愛く思える。

「だってネギ君と出来るのうれしいんだもん。じゃあね、クロード君！」

「ああ、行ってらっしゃい。頑張れよ。」

「うん！」

そう言っつて、まき絵は世界樹の方へと走って行った。

「さて、寝たいが、こんな時間だと、寝た瞬間に遅刻確定だな………」

仕方ない、とばかりに溜め息をつく、と、左腕につけた腕輪から、白い粒を呼び出した。

この白い粒は何かと聞かれれば、簡単にいうなれば………

「キシリトール粒、これだな。」

……とても高い効果を持つ目覚まし用の食べ物（？）である。

キシリトール成分を硬化させ、丸い形状にしたもの。

まんまキシリトールなので、噛んだ瞬間、口の中はとてつもない爽快感に覆われる。

「でも、これ食って正気を保ってられるのって俺ぐらいなんだよな………」

そう、とても小さい粒でも、キシリトールしかないため、含有するキシリトールの量は、普通のガムの数十倍だそうぞ。
そんなものが口の中に入れば、誰だって飛び跳ねてしまう。喜びの意味ではなく。

「これでとりあえず今日の授業始まるまでは寝なくて済むな。それ
っ。」

ヒョイ。

パクッ。

ガリッ。

スウウウウウウウウウウ！！

→常人ならここで気を失うか狂い始めるか。

「くっは~~~~、やっぱり効くねえ、これは。まあこれでもう眠く
なくなつたな。」

そう言いつつ、部屋に入り、とりあえず学校に行く用意をした。
しかし、それでも間に合う時間までまだ2時間ほどある。

「…………飯作るか。」

エプロンをつけ、台所に移り、飯を作り始める。
しかし、飯も20分前後で作り終わってしまい、食べ終わってもまだ5時前後にしかなくてない。

「さて、いよいよやること無くなっちゃったな。何をしようか……」

クロードは思い出す。

「あ、そうだ。ガ。ガイ。ーのビデオ借りてたんだ。見よつと。」

そう、クロードは日本に来てビデオを借りた。絵を見ただけで気に入ったらしい。

しばらく見ていて、クロードは呟く。

「ヘル&ヘ。ンって再現できそうだな……………」

呟きながら見ていて、気がついてみればもう遅刻寸前の時間帯にな

っていた。

「ヤバイ、見すぎた！」

そう言いながら、即座に制服に着替え、学校に向かうクロードであった。

クロードが学校へ向かう前、まき絵とネギが古菲による特訓でボロボロになってたことを、クロードは知らない……………。

8 話 目 : V S 鬼 決 着 ! 魔 法 生 徒 (後 書 き)

うゝん・・・・・・・・

やはり戦闘の時は書きづらいなあ……………(´・ω・´)

でも頑張って書いて見せますよ。

おもしろくなるかどうか分かりませんが……………o r z

……………次回をお楽しみに！

9 話目：親のよう？魔法生徒（前書き）

更新が遅れてすみませんorz
学校とか色々大変になってきて……（涙目
それではどうぞ

9 話目：親のよう？魔法生徒

「間に合ったか！？」

「ギリギリですよ、クロードさん。これからはもう少し早く来てくださいね？」

寮から全速力で走ってきたクロードに、ネギが言う。
クロードは軽く謝りながら席に着く。
席に座った瞬間に眠りにつこうとすると、

「昨日のやつ、お前がやったのだろう？」

エヴァが顔を向けずにクロードに問う。
その瞬間、クロードは固まる。

「……………知ってたんだ……………」

「当たり前だ。私を誰だと思っている。」

「はぁ、単独でやったのは悪いと思ってる。けど、何も被害がなかったんだから……………」

「私はお前が悪いとは一言も言っていないが？」

エヴァは意地悪な顔をしてからかっている。
からかわれたことを自覚したクロードは照れ隠しに頭の後ろを掻く。
そんなクロードを見て気分を良くしたエヴァが、

「まあ、あの働きは良いものだな。あの調子で頑張ればいいさ。」

この時のエヴァは相当機嫌が良かったのだろう。

エヴァという存在が皮肉もなしに他人を褒めるなんてことは、そうそうないだろう。

クロードは安心した様子で瞬時に眠りに落ちた。

（放課後）

「……………んみゅ……………」

「わ、なんて可愛い寝顔……………じゃなくて、起きなよ、クロード君！」

少し顔を赤らめた春日美空が起こそうとする。

クロードはもぞもぞと動く。まだ寝ていたいらしい。

「んんう、あと5分……………」

「何言ってるの、寝坊してる子供じゃあるまいし。」

「んあ？」
「うわあ！？」

いきなり起き上ったクロードに、美空は驚いている。
突然起きたこともあるが、それよりも体の大きさだ。

（クロードって、でかいな〜とは思ってたけど、まさかここまでとはね……）

椅子に座っているはずなのに、立っている美空と視線が同じなのである。

こんな状況になれば美空でなくても驚く。

「あれ、えと……春日さん？」
「そ、春日美空。美空でいいぞ。」
「オッケー。てか、授業は？」
「おいおい、もう放課後だし。」

美空は呆れながら言う。

それを聞いたクロードは喜ぶものだからさらに溜め息が出てくる。

「そっぴや、ネギ君とか古菲とかは世界樹行くなって言ってたな。」
「え、そうなの？俺も行こうって。」

そう言つてクロードは自分の荷物を担ぎ、足早に教室から出て行った。

クロードはさほど時間をかけずに世界樹についた。

すでにネギと古菲が拳法の稽古をしていたし、

明日菜と刹那が剣の稽古を、

まき絵は新体操の練習をしていた。

まき絵の練習を明日菜と刹那が稽古しながら見ていたといった感じになっている。

「やほ、皆頑張ってるね。」

「あ、クロードさん！」

ネギが振り返り、そして皆も続いて振り返る。

「どうだ、古菲。稽古の進み具合は。」

「それがネギ坊主は飲み込みが早くて早くて。普通1カ月で様になることを2・3時間で会得してしまうアルよ。」

「うわあ、何だそれ。もはや反則っていうか、チートみたいじゃないか。」

「チート？なにアルか、それ？食いもんアルか？」

「いや、食いもんじゃないし。まあとにかく、順調に進んでるみた

いで良かった。」

ネギならこうなるだろうと思っていたクロードの顔には、あまり驚きの色はない。

ただ、感心している。その方が正しい。

（魔法学校の頃もこんな感じだったから予想はしてたけど。ネギ君もどんどん強くなってくるな。）

クロードはそう思いながら、こんなことも思っていた。

（いつか、俺が本気を出せるくらいネギ君が強くなったら、戦ってみたいな……）

思いながらネギを見るクロードの目は、子の成長を嬉しそうに見る親の目のようだった。

そうしてちよつと時間を置いたクロードはあれ？と首をかしげる。そうしてから、思ったことをそのまま口にする。

「てか、ネギ君はなんで古菲に拳法習ってんだっけ？」

「ええ？今頃ですか？」

そういつてクロードを驚いた眼で見るのは桜咲刹那。

他の皆は呆れたような顔になってしまっている。

「そ、そんなこと言ったって、俺理由聞かされてないし……。」
「僕が古老師に拳法を習ってる理由は、強くなるためです。」

当たり前のように、しかも呆れた様子でネギが言う。

「今は試験に受かるために、でもありますけどね。」

クロードが呆気にとられているような顔になっているところを見て、追加してネギが言う。
そこで、クロードがまた疑問を持った。

「試験？なんの？」

「弟子入り試験よ。」

ネギの代わりに明日菜が答える。

「誰に弟子入りするっての？」

「エヴァちゃんによ。」

「へ……………」

口をあんぐりと開け、固まるクロード。
数秒後、正気を取り戻したようにはっとなり、首をぶるぶるとふるわせる。

「ち、チヨイ待って。ネギ君がエヴァさんに弟子入り!？」

「試験が合格したら、ですけどね。」

取り乱すクロードに、ネギが苦笑いしながら言う。

他の人も何故エヴァになのかは疑問だろうが、あまり関係なかったようだ。

エヴァ本人のことをよく知らない人は。

(あのエヴァンジェリンさんが、弟子をとろうとするなんて……。学校に長くいたおかげで心が広くなったのか、それともネギ君を気にいったのか……。)

なんて考えに浸るクロードだが、すぐにやめた。

あまり考えるのは、馬鹿らしいとでも思ったのだろう。

「まあ、試験合格するように頑張っただけ、あまり無理はしないように、だぞ?」

「はい、わかってます。」

「ならよろしい。ほら、皆それぞれやってたことを続けなよ。」

そいつってクロードは皆を促す。

やはり子を見る親のような目をしながら……………。

9 話目：親のよう？魔法生徒（後書き）

なんか最近書こうとすることが書きにくくなってきた……
でも、めげずに頑張るッす！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5157h/>

魔法先生と魔法生徒

2010年10月9日00時47分発行